
ワークショップⅣ

日本語の能力は1本の物差しで測れるか？ —価値観が多様化する中で、「評価」について考える—

宇佐美 洋（国立国語研究所）

ここ数年来、日本語教育の世界でも、「評価・テスト」 というキーワードが注目を集めています。日本語能力試験の改定、JF 日本語教育スタンダードに準拠した各種テストの開発、日本語コミュニケーション能力評価システムの策定等、「評価・テスト」に関する様々な試みが行われつつあります。いずれの試みも、学習者の能力や学習の成果を、互いに比較可能となるよう、1本の物差しの上に載せていく作業であるということが出来ます。

みなさん自身も日本語学校の教員として、学期ごとにひとりひとりの学生に点数をつける（つまり「1本の物差しの上に載せる」）、という作業をやっていらっしゃると思います。ただ、こうした作業を行いながら、迷いや戸惑いを感じたことはなかったでしょうか。日本語がよくできるはずの学生が、試験の点数はどうも振るわなかったり、その逆であったり。また作文や会話のテストをやってみたところ、採点者によって点数がまったく一致せず、大揉めに揉めたり。こういう問題は、採点者間で話し合えば話し合うほどこじれていくものです。

そもそも、日本語の能力とは1本の物差しで測れるのか？ 言語教育の現場に携わる者として、一瞬でもこのような疑問を持たなかった人はいないのではないのでしょうか。

この問いに対し、私なら次のように答えます：「日本語能力を1本の物差しで測ることは、技術的には可能です。しかし、1本の物差しで測れるようにすることで、非常に多くのものが抜け落ちてしまっています。数値で表された能力値とは、そのことを理解したうえで『戦略的に』活用すべきものです」と。

言語能力を1本の物差しで測ろうとすることで、何が抜け落ちてしまうのでしょうか。そしてそうした結果を、われわれ教育に携わるものはどのように解釈し、どのように活用していくのがよいのでしょうか。

このことに「正解」はありません。様々なワークと、参加者の皆さん同士の話し合いによって（もちろん私自身も話し合いには参加します）、答えのない問いについて、ともに考えを深めていければと思っています。